

## 調査テーマ

# 新型コロナウイルス感染症の影響と 子ども・青少年の運動・スポーツ

明治大学 政治経済学部 教授

高峰 修

子どもと青少年を対象とした今回の調査は、2020年初頭から広まった新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナウイルス）の影響を日本社会が受けたあとに行われた。それまで推奨されていた人々のコミュニケーションの形態が大幅に変わり、その影響は子どものスポーツ実施にまで及んだと思われる。

わが国の人々の運動・スポーツ実施に対する新型コロナウイルスの影響に焦点を当てた調査としては、すでに笹川スポーツ財団が2020年6月に行った「新型コロナウイルスによる運動・スポーツへの影響に関する全国調査」があるが（笹川スポーツ財団、2020）、この調査の対象は成人（18～79歳）である。したがって、今回の調査はコロナ禍の子どもと青少年の運動・スポーツ実施について従来の調査方法に基づいて行った初めての調査ということになる。

本報告書の調査結果の各章で紹介されているように、新型コロナウイルス感染拡大の影響とおぼしき変化はすでにくつかり示されている。本節ではそうした変化を踏まえ、コロナ禍における子どもと青少年の運動・スポーツ実施をめぐるいくつかの変数の変化について、より詳細に把握することにする。

## 1 性別・就学状況別・頻度群別にみる子どもの運動・スポーツ実施率の変化

性別にみた子ども（4～11歳）の運動・スポーツ実施率における年次推移は図1-7（調査結果、1章p.63）に示されているが、そこからは男子の非実施群が1.5ポイント増加し、高頻度群で1.6ポイント減少という傾向をみて取れる。他方、女子においては非実施群が1.4ポイント、中頻度群が1.2ポイント減少し、低頻度群と高頻度群が増加した。

図1-7の結果を就学状況別に分けると、また異なった実態がみえてくる。表1に2019年調査から2021年調査にかけて子ども（4～11歳）が「よく行った」運動・スポーツの実施率の推移を性別・就学状況別・頻度群別に示した。まず、男子の未就学児では非実施群が4.0ポイント増加し、全体としては不活発化の変化を示す。女子の未就学児でも高頻度群が12.0ポイント減という、表1内で最大の減少をみせる。ただし、非実施群に大きな変化はみられず、低頻度群と中頻度群が増加しており、全体としては中庸化の傾向だといえよう。

小学1・2年の男子においては中頻度群が減少し低頻度群が増加する傾向がみられるが、女子では中頻度群が減少する一方、高頻度群が増加しており、男女で逆向きの変化を示す。特に、女子の高頻度群における9ポイント近い増加は、表1における増加量としては最大である。

小学3・4年の男子では、高頻度群において5ポイント以上の減少がみられ、中頻度群で3.1ポイント増加している。他方、女子においては中頻度群で2.6ポイント増加したが、高頻度群の割合に変化はみられない。

小学5・6年においても男女で大きな違いがみられる。男子で実施率の変化量が最も大きいのは高頻度群の1.3ポイント増であり、小学5・6年男子の経年的変化は表1に示した性別×就学状況によるグループ内で最も小さい。他方、女子の高頻度群は6.1ポイント増えており、ほぼ同じポイントの減少が中頻度群において生じている。

【表1】4～11歳の運動・スポーツ実施率の年次推移（性別×就学状況別×頻度群別）

性別	就学状況	調査年	n	非実施群		低頻度群		中頻度群		高頻度群	
				%	変化量	%	変化量	%	変化量	%	変化量
男子	未就学児	2019年	170	3.5	4.0	21.2	-2.3	36.5	-1.9	38.8	0.2
		2021年	159	7.5		18.9		34.6		39.0	
	1・2年生	2019年	164	1.2	0.5	12.8	3.2	38.4	-3.5	47.6	-0.2
		2021年	175	1.7		16.0		34.9		47.4	
	3・4年生	2019年	217	0.5	1.9	11.5	0.1	28.6	3.1	59.4	-5.1
		2021年	164	2.4		11.6		31.7		54.3	
5・6年生	2019年	236	3.4	-0.2	14.8	-0.3	37.7	-0.8	44.1	1.3	
	2021年	249	3.2		14.5		36.9		45.4		
女子	未就学児	2019年	164	3.7	-0.4	16.5	4.8	29.9	7.4	50.0	-12.0
		2021年	150	3.3		21.3		37.3		38.0	
	1・2年生	2019年	164	3.7	-1.9	16.5	0.1	36.0	-7.0	43.9	8.8
		2021年	169	1.8		16.6		29.0		52.7	
	3・4年生	2019年	189	2.1	-1.1	17.5	-1.6	31.2	2.6	49.2	0.0
		2021年	195	1.0		15.9		33.8		49.2	
5・6年生	2019年	227	4.8	-1.3	21.1	1.5	41.9	-6.2	32.2	6.1	
	2021年	230	3.5		22.6		35.7		38.3		

注：変化量のセルは±3.0～5.9、±6.0～で色分けした

資料：笹川スポーツ財団「4～11歳のスポーツライフに関する調査」2021

## 2

## 性別・学校期別・レベル別にみる青少年の運動・スポーツ実施率の変化

表2には2019年調査から2021年調査にかけて青少年(12~21歳)が「よく行った」運動・スポーツにおける実施率の変化を性別・学校期別・レベル別に示した。中学校期の男子と女子では「レベル4」が減少する点で共通しているが、男子では「レベル3」が増加するのに対して、女子では「レベル0(非実施)」が増えている。

高校期では男女とも「レベル0」と「レベル1」で減少し、男子では「レベル2」、女子では「レベル3」が増加しており、全体的に同傾向の変化を示す。

大学期においては、男女でまったく異なった傾向を示している。まず男子では「レベル0」が3.3ポイント増加、「レベル2」が4.3ポイント減少し、全体的に不活発化の傾向を示す。他方、女子の「レベル0」は8.5ポイントも減り、「レベル2」と「レベル3」が増えるという活発化の傾向を示す。

勤労者においては、男女ともに「レベル0」が大幅に減少(男子は8.8ポイント、女子は13.6ポイントの減少)し、女子では「レベル1」と「レベル3」、男子では「レベ

ル3」と「レベル4」が増加している。いずれも全体的には活発化の傾向を示すといえるだろう。

以上のように、2019年から2021年にかけての実施率の変化について性別・実施頻度群/レベル別に加えて就学状況/学校期別にみると、図1-7(調査結果, 1章 p.63)には表れていない実態が浮かび上がる。男子だけをみた場合でも学校期によって運動・スポーツ実施率の変化の実態は多様であり、このことは女子にもあてはまる。また、同じ学校期で男女を比較しても、同様の傾向として捉えることができるのは高校期の男女における変化だけである。さらに表1で示されているように、男子の小学5・6年と女子の小学3・4年では、運動・スポーツ実施率の顕著な変化はみられなかった。

こうしたことから、コロナ禍における子どもや青少年の運動・スポーツ実施の変化は性別、就学状況・学校期、実施頻度・レベル等によって多様であることをまずはおさえておきたい。

【表2】12~21歳の運動・スポーツ実施率の年次推移(性別×学校期別×レベル別)

性別	学校期	調査年	n	レベル0		レベル1		レベル2		レベル3		レベル4	
				%	変化量	%	変化量	%	変化量	%	変化量	%	変化量
男子	中学校期	2019年	309	5.2	-1.6	2.3	1.7	17.8	0.9	28.8	5.3	46.0	-6.3
		2021年	252	3.6		4.0		18.7		34.1		39.7	
	高校期	2019年	262	14.1	-3.2	10.7	-3.5	13.7	7.1	19.1	-0.2	42.4	-0.1
		2021年	265	10.9		7.2		20.8		18.9		42.3	
	大学期	2019年	173	17.3	3.3	28.3	-1.3	32.9	-4.3	12.7	2.6	8.7	-0.2
		2021年	189	20.6		27.0		28.6		15.3		8.5	
	勤労者	2019年	108	38.0	-8.8	30.6	-3.2	21.3	-0.1	4.6	8.7	5.6	3.2
		2021年	113	29.2		27.4		21.2		13.3		8.8	
女子	中学校期	2019年	258	11.2	3.0	9.3	0.5	21.7	-1.2	27.5	1.6	30.2	-3.8
		2021年	254	14.2		9.8		20.5		29.1		26.4	
	高校期	2019年	248	27.4	-3.2	16.9	-3.2	19.0	0.9	14.5	8.2	22.2	-2.7
		2021年	256	24.2		13.7		19.9		22.7		19.5	
	大学期	2019年	192	38.0	-8.5	24.5	-1.2	22.9	3.3	12.0	6.1	2.6	0.3
		2021年	210	29.5		23.3		26.2		18.1		2.9	
	勤労者	2019年	88	53.4	-13.6	20.5	6.0	17.0	2.3	6.8	6.5	2.3	-1.1
		2021年	83	39.8		26.5		19.3		13.3		1.2	

注:変化量のセルは±3.0~5.9、±6.0~で色分けした

資料:笹川スポーツ財団「12~21歳のスポーツライフに関する調査」2021

### 3 性別・就学状況別にみる子どもの運動・スポーツ種目別実施率の年次推移

続いて、コロナ禍で子どもや青少年が実施した運動・スポーツの変化について、種目別の実施率における年次推移という側面から検討した。

表3には2019年調査から2021年調査にかけて子

も(4~11歳)が「よく行った」運動・スポーツ、運動あそび種目の実施率の変化を性別・就学状況別に示した。

表3にあげた種目は各性別、各就学状況における2021年調査結果の上位10位である。実施した運動・スポー

【表3】4~11歳の「よく行った」運動・スポーツ種目の年次推移(性別×就学状況別)

	男子					女子					
	順位	種目	2019年 実施率(%)	2021年 実施率(%)	変化量	順位	種目	2019年 実施率(%)	2021年 実施率(%)	変化量	
未就学児	1	自転車あそび	39.6	53.1	13.5	1	おにごっこ	51.9	53.8	1.9	
	2	おにごっこ	47.0	52.4	5.4	2	ぶらんこ	46.8	52.4	5.6	
	3	ぶらんこ	32.3	36.1	3.8	3	自転車あそび	34.2	39.3	5.1	
	4	かけっこ	33.5	34.7	1.2	4	かくれんぼ	38.0	33.8	-4.2	
	5	サッカー	32.9	33.3	0.4	5	鉄棒	28.5	33.8	5.3	
	6	かくれんぼ	23.8	29.3	5.5	6	なわとび(長なわとびを含む)	35.4	31.7	-3.7	
	7	水泳(スイミング)	31.7	25.2	-6.5	7	かけっこ	35.4	26.2	-9.2	
	8	なわとび(長なわとびを含む)	11.0	21.1	10.1	8	水泳(スイミング)	29.7	23.4	-6.3	
	9	鉄棒	15.9	17.7	1.8	9	体操	12.7	13.1	0.4	
	10	体操	11.6	12.2	0.6	10	ウォーキング	5.1	12.4	7.3	
	未就学児(n=147) 上位10種目 合計					35.7	未就学児(n=145) 上位10種目 合計				
小学1・2年	1	おにごっこ	61.7	64.0	2.3	1	おにごっこ	53.8	59.0	5.2	
	2	ドッジボール	37.0	36.0	-1.0	2	なわとび(長なわとびを含む)	41.8	53.0	11.2	
	3	サッカー	38.9	34.9	-4.0	3	自転車あそび	34.8	39.8	5.0	
	4	自転車あそび	30.2	34.9	4.7	4	鉄棒	31.6	37.3	5.7	
	5	水泳(スイミング)	45.1	32.6	-12.5	5	水泳(スイミング)	38.0	30.7	-7.3	
	6	なわとび(長なわとびを含む)	26.5	30.2	3.7	6	ぶらんこ	39.2	27.7	-11.5	
	7	かけっこ	20.4	21.5	1.1	7	ドッジボール	25.3	22.9	-2.4	
	8	かくれんぼ	17.9	20.3	2.4	8	かくれんぼ	23.4	22.3	-1.1	
	9	ぶらんこ	30.2	19.2	-11.0	9	かけっこ	17.7	17.5	-0.2	
	10	鉄棒	14.8	16.3	1.5	10	体操	7.0	10.2	3.2	
	小学1・2年生(n=172) 上位10種目 合計					-12.8	小学1・2年生(n=166) 上位10種目 合計				
小学3・4年	1	おにごっこ	54.6	58.8	4.2	1	おにごっこ	52.4	60.6	8.2	
	2	ドッジボール	47.2	46.9	-0.3	2	なわとび(長なわとびを含む)	36.2	35.8	-0.4	
	3	サッカー	49.1	43.1	-6.0	3	水泳(スイミング)	37.8	31.6	-6.2	
	4	水泳(スイミング)	36.1	31.9	-4.2	4	ぶらんこ	32.4	31.6	-0.8	
	5	なわとび(長なわとびを含む)	13.4	26.9	13.5	5	鉄棒	27.6	27.5	-0.1	
	6	自転車あそび	21.3	25.0	3.7	6	ドッジボール	22.2	27.5	5.3	
	7	ぶらんこ	14.4	19.4	5.0	7	自転車あそび	33.0	26.4	-6.6	
	8	かくれんぼ	11.1	18.1	7.0	8	かくれんぼ	13.5	18.1	4.6	
	9	野球	13.0	14.4	1.4	9	一輪車	14.6	12.4	-2.2	
	10	キャッチボール	10.2	12.5	2.3	10	かけっこ	14.6	10.4	-4.2	
	小学3・4年生(n=160) 上位10種目 合計					26.5	小学3・4年生(n=193) 上位10種目 合計				
小学5・6年	1	おにごっこ	43.9	53.1	9.2	1	おにごっこ	57.4	57.2	-0.2	
	2	ドッジボール	43.4	45.6	2.2	2	なわとび(長なわとびを含む)	28.2	32.4	4.2	
	3	サッカー	50.4	43.2	-7.2	3	ドッジボール	35.2	31.1	-4.1	
	4	水泳(スイミング)	29.4	26.1	-3.3	4	バドミントン	23.6	23.4	-0.2	
	5	バスケットボール	19.3	17.4	-1.9	5	ぶらんこ	18.1	23.0	4.9	
	6	自転車あそび	15.8	16.2	0.4	6	自転車あそび	20.4	21.2	0.8	
	7	キャッチボール	10.5	15.4	4.9	7	水泳(スイミング)	27.8	20.7	-7.1	
	8	なわとび(長なわとびを含む)	10.1	14.5	4.4	8	鉄棒	15.3	18.5	3.2	
	9	バドミントン	7.0	12.9	5.9	9	かくれんぼ	13.0	14.9	1.9	
	10	ぶらんこ	6.1	12.9	6.8	10	かけっこ	9.3	12.2	2.9	
小学5・6年生(n=241) 上位10種目 合計					21.4	小学5・6年生(n=222) 上位10種目 合計					6.2
男子(n=720) 上位10種目 合計					70.7	女子(n=726) 上位10種目 合計					14.0

注1:表中のn数は2021年度の値

注2:変化量のセルは±3.0~5.9、±6.0~で色分けした

資料:笹川スポーツ財団「4~11歳のスポーツライフに関する調査」2021

ツ、運動あそび種目の変化においても、例えばかくれんぼは未就学児の男子で5.5ポイント増に対して女子では4.2ポイントの減少を示すなど、その動向は多様かつ複雑である。しかし、どの就学状況にも共通した傾向として、水泳（スイミング）が男女とも、さらにサッカーが男子で減少傾向にある。これらの種目は習いごととして活動することが多いと思われ、子どもの運動・スポーツ実施においてそうした種目が実施できなくなった実態を確認できる。

他方、自転車あそびやなわとび（長なわとびを含む）をはじめとしてぶらんこ、かくれんぼ、鉄棒など子ども同士の遊びとして行われる種目の実施率の増加も多く観察され、それらが水泳（スイミング）やサッカーの減少分を超えている性別や就学状況もある。各性別、就学状況の最下段には、上位10種目の2019年から2021年にかけての増減を合計した値を示した。この値には同一人物が複数種目を実施した場合も含まれるので、例えば男子の未就学児において運動・スポーツ、運動あそびを行う人が147人の35.7%にあたる人数分が増えたことは意味しないが、ある種目は実施率が増えてある種

目は減るといった上位10種目における実施の変化の全体像を把握することができる。

男子では未就学児で35.7ポイント増という4~11歳の男女において最も大幅な増加を示すが、小学1・2年では反対に12.8ポイント減少した。しかし小学3・4年、小学5・6年ではいずれも20ポイント以上増加し、上位10種目の増減において男子では全体的に増加傾向にあるといえる。

他方、女子における減少は小学3・4年で2.4ポイントに留まるが、増加も小学1・2年における7.9ポイントが最大であり、男子ほどの増加は示さない。このことは表3の最下段に示した男女別の合計値にも表れており、4~11歳の男子全体では70.7ポイント増加したが、女子全体の増加は14.0ポイントであり、男子の5分の1に留まる。しかし、男女とも2019年から2021年にかけて上位10種目における実施率の変化量の合計はプラスであり、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて実施できなくなる種目があった一方で、それを埋め合わせる以上の活動が、運動あそびの種目を中心に子どもたちによって行われていることを確認できる。

## 4

## 性別・学校期別にみる青少年の運動・スポーツ種目別実施率の年次推移

表4には中学校期以降の青少年（12~21歳）における2019年から2021年にかけて「よく行った」運動・スポーツ実施種目の実施率の変化を性別・学校期別に示した。子ども（4~11歳）のそれを示した表3と見比べると、青少年の女子においては実施率が減少した種目が子どもよりも少なく、6ポイント以上の減少を示したのは勤労者のキャッチボールだけであった。

それと比べると、男子では種目数は少ないながら、種目別の実施率の大幅な減少傾向がみられる。それらの代表的な種目はサッカーやバスケットボールであるが、こうした種目が勤労者では減少していないことから、中学校期、高校期、大学期におけるサッカーやバスケットボールは運動部活動やサークルなどの場で実施されていたことが推測される。

一方、運動部活動としてはバレーボールやバドミントンも行われていたと考えられるが、これらの種目の実施率は男女を問わず概して増加傾向にある。サッカーやバスケットボールとバレーボールやバドミントンとの違いは、前者が身体接触を伴い、両チームのプレーヤーが入り交じってプレーするのに対して、後者では自分と相手

のプレーエリアがネットで仕切られており、原則として身体接触もなく、前者ほど多くのプレーヤーが入り交じることがない点にある。

さらに、勤労者の男子においてはサッカー（3.9ポイント）とバスケットボール（1.6ポイント）、女子でもバスケットボール（2.2ポイント）の実施率が減少しておらず、個々人が身体接触を伴うサッカーやバスケットボールの実施を避けていたわけではないこともわかる。こうしたことから、各学校でそれぞれの運動部活動が、各競技の特性と新型コロナウイルスの感染の可能性を勘案しつつ、運動部活動としての実施の範囲を判断していたと考えられる。

ただし、高校期の男子ではバレーボールとバドミントンの実施率が5ポイント以上増加しているのに対して、女子ではわずかながら減少している。また、大学期の男子のサッカーは6.0ポイント減少しているのに対して、女子では3.9ポイントの増加を示す。このようにコロナ禍において男女の実施率の変化に差異が生じることは、同じ種目でありながら男女のスポーツ実施をめぐる環境や条件に違いがあることを示唆していると思われる。

各性別と学校期別における上位10種目の2019年から2021年にかけての増減を合計した値をみると、男子の大学期でわずかに0.9ポイント減を示す以外は、16～38ポイントの増加を示している。つまり、12～21歳の青少年においても新型コロナウイルス感染拡大の影響

を受けつつ、上位10種目の実施率の変化量としては増加しており、ある意味で活発化したことがわかる。表4の最下段に示した男女別の合計値は、男子よりも女子においてより活発化したことを示している。

【表4】12～21歳の「よく行った」運動・スポーツ種目の年次推移（性別×学校期別）

	男子					女子					
	順位	種目	2019年実施率(%)	2021年実施率(%)	変化量	順位	種目	2019年実施率(%)	2021年実施率(%)	変化量	
中学校期	1	サッカー	41.0	37.9	-3.1	1	ジョギング・ランニング	17.0	27.1	10.1	
	2	ジョギング・ランニング	13.3	22.2	8.9	2	バドミントン	19.7	25.2	5.5	
	3	野球	23.5	21.0	-2.5	3	おにごっこ	24.9	24.8	-0.1	
	4	おにごっこ	18.1	20.6	2.5	4	バレーボール	17.9	22.5	4.6	
	5	バスケットボール	27.3	18.1	-9.2	5	なわとび(長なわとびを含む)	14.8	18.8	4.0	
	6	卓球	16.7	17.7	1.0	6	筋力トレーニング	12.7	17.9	5.2	
	7	バレーボール	9.6	17.3	7.7	7	バスケットボール	14.4	16.1	1.7	
	8	バドミントン	11.6	16.5	4.9	8	卓球	12.7	12.4	-0.3	
	9	キャッチボール	9.9	13.2	3.3	9	ドッジボール	9.2	11.9	2.7	
	10	筋肉トレーニング	9.6	13.2	3.6	10	水泳(スイミング)	14.8	11.5	-3.3	
中学校期(n=243) 上位10種目 合計					17.1	中学校期(n=218) 上位10種目 合計					30.1
高校期	1	サッカー	35.6	37.7	2.1	1	バドミントン	27.8	27.3	-0.5	
	2	ジョギング・ランニング	18.2	22.9	4.7	2	ウォーキング	15.0	23.7	8.7	
	3	バスケットボール	27.6	21.6	-6.0	3	ジョギング・ランニング	21.7	22.7	1.0	
	4	筋肉トレーニング	13.8	19.5	5.7	4	筋力トレーニング	13.3	20.1	6.8	
	5	バドミントン	12.0	18.6	6.6	5	バレーボール	19.4	17.0	-2.4	
	6	野球	19.6	16.9	-2.7	6	なわとび(長なわとびを含む)	8.9	16.5	7.6	
	7	バレーボール	10.7	16.5	5.8	7	バスケットボール	14.4	13.4	-1.0	
	8	卓球	13.8	11.0	-2.8	8	おにごっこ	11.1	11.9	0.8	
	9	サイクリング	6.2	9.7	3.5	9	ヒップホップダンス	10.6	9.8	-0.8	
	10	テニス(硬式)	6.7	9.3	2.6	10	卓球	12.8	9.3	-3.5	
高校期(n=236) 上位10種目 合計					19.5	高校期(n=194) 上位10種目 合計					16.7
大学期	1	筋肉トレーニング	19.6	24.0	4.4	1	ウォーキング	28.6	38.5	9.9	
		ジョギング・ランニング	22.4	24.0	1.6	2	筋力トレーニング	16.0	28.4	12.4	
	3	サッカー	27.3	21.3	-6.0	3	ジョギング・ランニング	19.3	24.3	5.0	
	4	野球	18.2	20.0	1.8	4	バドミントン	23.5	21.6	-1.9	
	5	ウォーキング	14.0	17.3	3.3	5	バスケットボール	16.0	16.2	0.2	
	6	キャッチボール	3.5	14.7	11.2	6	バレーボール	12.6	14.2	1.6	
	7	バレーボール	12.6	13.3	0.7	7	卓球	10.9	12.2	1.3	
	8	バスケットボール	19.6	12.7	-6.9	8	なわとび(長なわとびを含む)	5.9	10.8	4.9	
		フットサル	16.8	12.7	-4.1		体操	8.4	10.8	2.4	
		ボウリング	19.6	12.7	-6.9	10	サッカー	4.2	8.1	3.9	
大学期(n=150) 上位10種目 合計					-0.9	大学期(n=148) 上位10種目 合計 <sup>※</sup>					38.9
勤労者	1	サッカー	14.9	18.8	3.9	1	ウォーキング	31.7	42.0	10.3	
		ジョギング・ランニング	11.9	18.8	6.9	2	バドミントン	12.2	28.0	15.8	
	3	野球	10.4	17.5	7.1	3	筋力トレーニング	9.8	20.0	10.2	
	4	筋力トレーニング	17.9	16.3	-1.6	4	ジョギング・ランニング	19.5	16.0	-3.5	
	5	バスケットボール	13.4	15.0	1.6	5	バレーボール	17.1	14.0	-3.1	
		ボウリング	19.4	15.0	-4.4	5	ぶらんこ	12.2	14.0	1.8	
	7	卓球	4.5	12.5	8.0	7	体操	9.8	12.0	2.2	
		ウォーキング	4.5	11.3	6.8		バスケットボール	9.8	12.0	2.2	
	8	スノーボード	10.4	11.3	0.9	9	キャッチボール	17.1	8.0	-9.1	
	10	釣り	7.5	10.0	2.5		キャンプ	2.4	8.0	5.6	
勤労者(n=80) 上位10種目 合計					31.7	勤労者(n=50) 上位10種目 合計					32.4
男子(n=709) 上位10種目 合計					67.4	女子(n=610) 上位10種目 合計					118.1

※女子の大学期では2021年調査の10位が3種目あるため、増加量が最も少なかった「ぶらんこ」の増加量だけを加算している

注1:表中のn数は2021年度の値

注2:変化量のセルは±3.0～5.9、±6.0～で色分けした

資料:笹川スポーツ財団「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2021

## 5

## 新型コロナウイルス感染拡大が子どもの運動・スポーツ実施にもたらした変化

表5には、新型コロナウイルス感染拡大が子どもの運動・スポーツ、運動あそびの時間や環境に変化をもたらしたかの認識について性別・就学状況別に示した。具体的な変化の内容としては、施設や用具が使えなくなるなどのマイナスの変化6項目と、運動をする時間が増えるなどのプラスの変化3項目を準備した。

まず変化があったと回答した割合は、男子では未就学児の59.7%から小学5・6年の75.9%へと増加傾向を示すのに対して、女子では未就学児の61.7%から小学3・4年の58.0%へとわずかながら減少したのちに小学5・6年の65.2%へと増加した。4~11歳の子ども全体としては約60~75%の子どもが運動・スポーツ、運

動あそびの実施に新型コロナウイルス感染拡大の影響があったと回答している。

変化が生じた具体的な内容は男女や就学状況を問わずほぼ同一であり「園・校庭やホール、体育館がいままでどおり使えなくなった」が約40~50%、「スポーツ教室やスポーツ少年団、学校の運動クラブなどの活動が減った」が約30~60%、「運動・スポーツ・運動あそびをする時間が減った」が約20~55%を占めた。他方、回答の割合はやや低くなるが「家族と運動・スポーツ・運動あそびをする時間が増えた」と回答した割合は小学5・6年の男子を除いて約20%以上を占めており、注目すべき変化であろう。

【表5】 4~11歳の新型コロナウイルス感染拡大による運動・スポーツ、運動あそびの変化  
(性別×就学状況別)

		男 子				女 子			
		未就学児 (n=159)	小学1・2年 (n=174)	小学3・4年 (n=163)	小学5・6年 (n=249)	未就学児 (n=149)	小学1・2年 (n=169)	小学3・4年 (n=193)	小学5・6年 (n=230)
	この1年間に、新型コロナウイルスの影響を受け、感染が広がる前とくらべて、運動・スポーツ・運動あそびをする時間や環境に変化があった	59.7 (n=95)	64.9 (n=113)	74.2 (n=121)	75.9 (n=189)	61.7 (n=92)	60.4 (n=102)	58.0 (n=112)	65.2 (n=150)
		↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
1	幼稚園・保育園、学校の園・校庭やホール、体育館がいままでどおり使えなくなったことがあった	50.5	44.2	52.9	49.2	48.9	49.0	45.5	39.3
2	幼稚園・保育園、学校で貸し出しているホールなどの用具が使えなくなったことがあった	11.6	8.8	14.9	15.9	8.7	13.7	19.6	14.7
3	ふだん通っているスポーツ教室やスポーツ少年団、学校の運動クラブなどの活動が減ったことがあった(またはなくなったことがあった)	30.5	49.6	62.0	62.4	33.7	45.1	61.6	54.7
4	ふだん遊んでいる公園や広場が閉鎖されたことがあった	33.7	38.1	22.3	14.8	42.4	40.2	20.5	16.0
5	参加する予定であったスポーツ大会が延期・中止になったことがあった	7.4	31.9	45.5	47.1	20.7	29.4	40.2	44.7
6	運動・スポーツ・運動あそびをする時間が減った	23.2	38.9	51.2	55.0	31.5	44.1	47.3	48.7
7	運動・スポーツ・運動あそびをする時間が増えた	6.3	7.1	8.3	4.8	7.6	6.9	5.4	7.3
8	オンラインを活用して運動・スポーツ・運動あそびをすることが増えた(クラブの活動、体育の授業など含む)	0.0	1.8	0.0	4.8	0.0	6.9	5.4	5.3
9	家族と運動・スポーツ・運動あそびをする時間が増えた	28.4	22.1	24.0	14.8	27.2	19.6	20.5	20.0

資料：笹川スポーツ財団「4~11歳のスポーツライフに関する調査」2021

## 6 新型コロナウイルス感染拡大が青少年の運動・スポーツ実施にもたらした変化

表6には、新型コロナウイルス感染拡大が青少年の運動・スポーツ、運動あそびの時間や環境に変化をもたらしたかの認識について性別・学校期別に示した。

変化があったと回答した割合は、男子では高校期で最も多く68.1%、中学校期67.7%、大学期52.7%と続き、勤労者では30.1%を占める。女子では中学校期の61.8%から大学期の46.2%へと減少し、勤労者では男子と同程度の31.3%であった。つまり男女ともに、勤労者を除く中学校期から大学期の青少年の46~68%が運動・スポーツの実施に新型コロナウイルス感染拡大の影響があったと回答している。

具体的な変化の内容は、子どものそれとほぼ同じであり「校庭や体育館、スポーツ施設がいままでどおり使えなくなった」「学校の運動部やサークル、民間のスポーツクラブなどの活動が減った」「運動・スポーツ・運動あそびをする時間が減った」であったが、それらに加えて「参加する予定であったスポーツ大会が延期・中止になった」をあげる人が23~70%おり、特に中学校期と高校期の男女が認識した主たる変化である。

【表6】12~21歳の新型コロナウイルス感染拡大による運動・スポーツ、運動あそびの変化  
(性別×学校期別)

	男子				女子			
	中学校期 (n=251)	高校期 (n=263)	大学期 (n=188)	勤労者 (n=113)	中学校期 (n=254)	高校期 (n=256)	大学期 (n=210)	勤労者 (n=83)
この1年間に、新型コロナウイルスの影響を受け、感染が広がる前とくらべて、運動・スポーツ・運動あそびをする時間や環境に変化があった	67.7 (n=170)	68.1 (n=179)	52.7 (n=99)	30.1 (n=33)	61.8 (n=157)	54.3 (n=139)	46.2 (n=97)	31.3 (n=26)
	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
1 学校の校庭や体育館、スポーツ施設がいままでどおり使えなくなったことがあった	60.6	57.0	65.7	57.6	53.5	48.9	67.0	53.8
2 学校やスポーツ施設で貸し出しているボールなどの用具が使えなくなったことがあった	11.8	9.5	10.1	6.1	12.7	6.5	8.2	3.8
3 所属している学校の運動部やサークル、民間のスポーツクラブなどの活動が減ったことがあった(またはなくなったことがあった)	68.8	59.8	45.5	30.3	59.2	51.8	51.5	23.1
4 普段利用している公園や広場が閉鎖されたことがあった	15.3	12.3	19.2	21.2	13.4	5.8	8.2	23.1
5 参加する予定であったスポーツ大会が延期・中止になったことがあった	70.6	61.5	38.4	27.3	58.6	56.1	41.2	23.1
6 運動・スポーツ・運動あそびをする時間が減った	65.3	51.4	50.5	66.7	61.1	46.8	47.4	30.8
7 運動・スポーツ・運動あそびをする時間が増えた	5.9	3.9	7.1	6.1	8.3	6.5	11.3	15.4
8 オンラインを活用して運動・スポーツ・運動あそびをすることが増えた(部活動・クラブなどの、体育の授業を含む)	5.3	1.7	6.1	0.0	8.3	5.8	15.5	3.8
9 運動部活動・クラブなどの活動方法について仲間やチームメンバーと話し合う機会が増えた	5.9	3.9	7.1	3.0	11.5	7.2	10.3	3.8

資料：笹川スポーツ財団「12~21歳のスポーツライフに関する調査」2021



## 7 まとめ

本節ではコロナ禍における子どもと青少年の運動・スポーツ実施をめぐるいくつかの変数の変化について検討してきた。本報告で用いたデータの調査は緊急事態宣言が解除された時期に行われたが、それでもこれまでの調査結果にはみられない大幅な変化が生じていることを確認できる。しかし、そうした変化は新型コロナウイルス感染拡大の影響によって子どもや青少年が運動・スポーツ、運動あそびをできなくなった、という単純なものではなかった。

子ども（4～11歳）では性別や就学状況を問わず水泳（スイミング）の実施率、男子では加えてサッカーの実施率が下がっていた（表3）。これは表5にて「スポーツ教室やスポーツ少年団、学校の運動クラブなどの活動が減った」という回答が約30～60%を占めた結果とも関係があるだろう。実施頻度群の分布の変化（表1）においては、特に男子で実施頻度が低下する傾向がみられたが、他方では運動あそび種目を中心に全体的な実施率は高まっており（男子の小学1・2年を除く：表3）、女子の小学1・2年と小学5・6年では実施頻度の分布においても増加傾向も示した（表1）。

「園・校庭やホール、体育館が使いなくなった」「公園や広場が封鎖された」は特に男女の未就学児や小学1・2年に対する影響であり、小学3・4年、小学5・6年になると「参加する予定であったスポーツ大会が延期・中止になった」影響を受けている。

青少年（12～21歳）では男子の高校期と勤労者、女子の高校期と大学期、勤労者において実施レベルの分布が全体として上昇する傾向も確認された（表2）。表4の上位10種目による実施率合計でも、男子大学期を除いて概して増加傾向がみられた。

中学校期と高校期には男女いずれも「参加する予定であったスポーツ大会が延期・中止になった」影響を、大学期と勤労者は「校庭や体育館、スポーツ施設がいままでどおり使えなくなる」影響を特に受けていたが（表6）、そうした中でも筋力トレーニングやジョギング・ランニング、さらにはなわとびやウォーキングなど個人で行う種目の実施率が増えていた（表4）。コロナ禍において青少年たちは、それまで実施してきた種目ができなくなるだけではなく、他の種目に変更したり、実施の頻度などを変えたりしながら運動・スポーツと接していた姿をうかがい知ることができる。

一方で、例えば男女の小学1・2年の中頻度群が減る中、男子では低頻度群が、女子では高頻度群が増えたのはなぜなのか、あるいは高校期のバドミントンやバレーボールが男子では増加したのに対して女子では減少傾向を示すのはなぜなのかなど、本調査データから説明しきれない傾向も散見された。こうした点については、コロナ禍の子どもや青少年の運動・スポーツ実施を質的に記述する報告なども使いながら解釈していく必要があるだろう。

### 参考文献

笹川スポーツ財団（2020）新型コロナウイルスによる運動・スポーツへの影響に関する全国調査